

交通安全啓発人形 渋沢栄一翁



80体目、最後の展示！

9月20日に、交通安全啓発人形が寄居警察署東の交差点に展示され、地元住職が交通安全祈願を行いました。今回で80体目となる交通安全啓発人形には、明治維新後の日本経済の発展に大きく貢献した「渋沢栄一翁」を選定しました。皆さんの交通安全を渋沢栄一翁が願い、見守りました。なお、人形の展示は、制作メンバーの高齢化や後継者不足のため、今回で最後となりました。人形が長い間願ってきた交通安全を、一人一人が意識して、交通事故防止に努めていきましょう。

※交通安全啓発人形の展示は終了しました。



齊藤ともえさんが受賞！ 関東管区行政評価局長表彰

齊藤ともえさん(上平・下小路)が、関東管区行政評価局長表彰を受賞されました。齊藤さんは平成23年に総務大臣から行政相談委員に委嘱され、町の「心配ごと相談」で多くの相談に親切丁寧に応じられ、行政機関に対する意見や要望等の解決に尽力されました。行政相談委員としての顕著な活動業績が認められて、今回の受賞となりました。齊藤さんは「関係機関や相談委員の皆さんのご支援、ご協力に感謝しています」と話してくれました。

寄居町の 民話とは何ぞや?

おおさきを封じ込めた話

むかしむかし、折原でのお話です。『おおさき』といって、ねずみに似た、大人の手のひらぐらいの生き物がいました。しっぽが長く、ギイギイギイギイとよく鳴き、銀色をしていて、月夜の晩には、黒光りしてみえました。それがないそう悪さをしたものです。農家で大事に育てているお蚕の上をころころころころと転がって、からだの毛のなかにお蚕をいくつもくつつけたまま、どこかに持っていったら、まったり、囲炉裏で魚を串にさして何本もやいていって、いつのまにか全部なくなってしまうと、また、にわたりのたまごを次から次へとわって逃げていってしまうこともよくありました。悪さはそればかりではありませんでした。病気のひとにとりつき、かつてなことをしゃべらせたり、急にさわぎださせて周りのひとたちを困らせたりすることもよくありました。また、『おおさき』が自分のたべたいものを病人にいわせて、家のひとがそれを持ってくると、さつさととってどこかへいってしまい、また何かほしくなると、もどってきて同じことをくり返すこともありました。もっとひどいときには、病人のからだのなかに入り込み、内臓を食いやぶって、命をうばってしまうこともあったのです。

あるとき、『おおさき』にとりつかれて大泣きすること

もがどうしても泣きやまないで、困りはたてた母親が神棚の三峰神社のお札をおがむと、泣いているのがピタリと止まりました。次の日、その神棚のしたに、あわてて逃げた『おおさき』の、ちぎれたしっぽが落ちていました。それを聞いた村のひとたちは、

「これで少しは『おおさき』も懲りただろう。」
「そうだなあ。」
と、口々にいいあいました。

ところが、相変わらず『おおさき』がいたるところで悪さをするので、拝みやで、井戸掘りのおじいさんが、「こんなにいっぱい悪さするんじゃ、しょうがない。」
「もう、これ以上悪さはしてくれないな。」
というねがいを込めて、『おおさき』をそこへ封じ込めてしましました。

それ以来、『おおさき』が皆を困らせることはなくなり、安心してくらせるようになったということです。

(封じ込めた祠は、玉淀湖の橋のそばに、今でもあるそうです。)

出典「こどものための寄居町民話集」